



KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

2025



## INDEX

「本物の豊かさ」をもとめて

・・・02

## TOPICS

---

高度急性期医療を支え続けるハードづくり

岐阜県立多治見病院 ・・・03

[一般病院 現地建替]

いつでも頼りになる治療のための病院

十和田済誠会病院 ・・・05

[精神科病院 移転新築]

## WORKS

---

井上病院

[一般病院 新築]

・・・07

介護老人保健施設 あずさ

[高齢者福祉施設 移転新築]

・・・08

進藤医院・

看護小規模多機能型居宅介護 藤の華

[クリニック・高齢者福祉施設 新築]

・・・09

特別養護老人ホーム 談話館

[高齢者福祉施設 増築]

・・・09

## 「本物の豊かさ」をもとめて

代表取締役 鈴木 慶治

昨年元旦の能登半島地震から一年。さらに9月には豪雨災害も加わり、地理的要因も重なり今でも復旧が進まない状況です。被災地の皆様には改めて心からお見舞い申し上げます。

私たち設計事務所が貢献できるまでには時間がかかり、いつも情けなく思うのですが、神戸や東北の時のように、時間をかけて復興のために尽力できたらと考えています。

そのような中、その能登半島の付け根、白山市にある「公立松任石川中央病院」の第七次増改築工事が昨年12月に着工に至りました。震源から100kmという距離にもかかわらず揺れは少なく、病院の皆さんは被災者を医療者として支え続けながら、熱意をもって議論を続けてくださり、私たちは設計を進めることができました。皮肉にも震災があったことで災害拠点病院としての機能強化を図るなどの計画を後押しする形になりました。工事の段階に入りましたが、現在の設計を技術面で監理するだけでなく、計画・機能・デザイン共にもう一度見直しを掛けながら、丁寧により良い作品に仕上げなくてはなりません。

日常に使われる我が国の建物で“ひとの寿命”を超えて長生きするポテンシャルの高い建築は残念ながら“まれ”です。戦後の早期復興と経済効率が影響しています。多くの医療福祉建築も例外ではありません。改めてこの時代に考えるべきは、災害にも強く地球環境にも優しい“世紀単位”で大切に使うことができる“まち”を丁寧につくっていくことです。しかし国内では人口減少・高齢化が進み、海外では紛争が止まない時代の中でこれを実現することは容易ではありません。その結果建設コストが異常高騰している近年、完成する都内の巨大病院はぱっと見“豪華”ですが中身は機能を満たしているだけという味気ない建築が散見されます。私が無謀にも「病院の建築の質を何とかしたい」と思い、我が社の門をたたいた頃に逆戻りしてしまっているのではないかと感じることもさえあります。インバウンド需要のホテルや都市の再開発、物流巨大倉庫などの建設計画が十分ある建築業界では、手間がかかり収入に繋がらない医療福祉への取り組み意欲は希薄です。しかし医療福祉はどの時代にも必要であり、その施設は常に「健康」であることが求められます。

私たちは日常の生活の中にあるべき「本物の豊かさ」とは何かを常に考え、時代にふさわしい環境づくりをこころがけています。プロジェクトの大小に限らず、医療・社会・環境、様々な背景を十分理解し、提案を行うことができるプロフェッショナルでありたいと考えています。時代を超えてその質を維持することに苦労は少なくありませんが、人材不足で何をやるにも時間がかかることを前向きに捉え丁寧な取り組みをし、共感してくれる仲間を増やして、実質的に社会に貢献できるものでありたいと考えています。

今後とも皆様のご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



土岐川対岸からの外観全景 美濃焼タイルを使用し温かみのある周辺と調和した外観

岐阜県東濃・可児地域における基幹病院として、高度急性期・急性期医療を提供し続けてきた岐阜県立多治見病院の中央診療部門の建替えプロジェクトです。このプロジェクトは大きく分けて3つのフェーズで構成されています。【1期工事】新中央診療棟建築工事、【2期工事】既存棟改修工事、【3期工事】既存棟解体・外構整備工事になります。その1期工事の新中央診療棟が2024年1月に竣工しました。今回のプロジェクトでは基幹病院として求められる機能を実現しながら、同時にこの病院の将来展開を見据えた計画としています。

#### ■診療機能の連携強化

5層にわたる診療機能をいかに連携させるかが重要なテーマとなりました。そこで機能別エレベーター（EV）とスタッフ専用階段、部門間をつなぐホールを一体化した空間をエマージェンシーパス（EP）と称して建物中央部に配置しました。

1階の救急から血管造影（2階）、内視鏡（3階）、手術部・救命救急センター（4階）、NICU（5階）、さらに屋上のヘリポートがEPによって連携可能となっています。

またEPはセキュリティーレベルを上げることで患者とスタッフ動線の完全分離が実現でき、迅速かつ安全な患者搬送を可能にしています。

1階には救急・外来・中央採血・生理検査部門など患者の利用頻度の高い部門を配置し、利便性に配慮しています。外来の中央部には外来日帰りセンターを設け、処置・注射及び日帰り手術後のリカバリーの効率化を目指しました。

中央診療部門の要となる4階の手術部と救命救急センターは直線的につながることにより両部門のシンプルで一体的な運用が可能です。さらに救命救急センターには手術室と直結した病室を設置することで、手術後の患者搬送の負担低減にも寄与しています。また救命救急センターのICU病室には可動式パーティションを設置し、患者の状態に合わせオープンな環境から個室への転換を容易にしています。

患者の状態に合わせた可動式パーティション（ICU病室）



オープン時（※1） 個室となるクローズ時（※1）

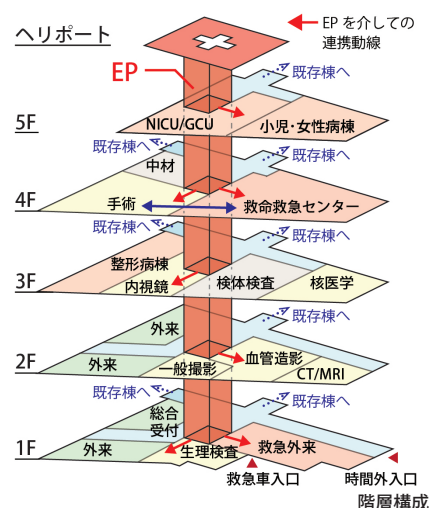


救命救急センターとつながる手術ホール（正面奥）（※1）

#### ■防災対策の強化

災害拠点病院として免震構造の採用と合わせ、浸水対策を強化しました。

放射線機器などの重要医療機器を2階以上に設置し、1階が浸水した場合でも診療が継続可能としています。また、一部のエレベーターには止水板を設置し浸水時でも稼働可能としています。さらに、敷地境界に沿った壁堤防を3期工事完了までに設置予定です。



#### □建築概要

建築主：地方独立行政法人岐阜県立多治見病院  
所在地：岐阜県多治見市  
病床数：105床（全体539床）  
構造規模：鉄骨造 免震構造  
地上5階 塔屋2階  
延床面積：23,893㎡  
竣工年月：2024年1月  
設計監理：共同建築設計事務所・熊谷設計共同企業体  
撮影：リフレクト、所員（※1）  
出典：国土地理院（※2）





岐阜県産材をふんだんに使用した待合ホール、災害時にはトリアージスペースとして機能

## ■地域に親しまれる病院であるために —地域ブランドの活用—

岐阜県産材の東濃ヒノキを用いたカーテンウォールや地元で生産されるタイルを外壁・サインに使用しています。照明においても地域資材の美濃和紙を使用することで利用者にとって温かみのある空間を創出し、地域の顔となるような建築を目指しました。

## —わかりやすい外来—

フロア全ての外来受付を一望できる外来モールや吹き抜けを設け、視認性を高め患者にとって現在位置がわかりやすい平面・断面構成としました。外来部門の内装は患者が落ち着いて治療を受けられるように“清流の国ぎふ”にふさわしい青色をポイントカラーとして清涼感を持った落ち着きのある空間としています。

## —患者によりそう病棟—

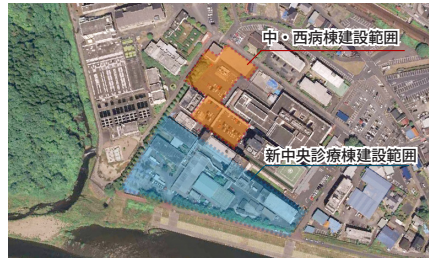
整形病棟と小児・女性病棟の内装は既存の中・西病棟の木調を踏襲し、温かみのある空間としました。NICU・GCUの照明には1日の太陽光の明るさを再現したサーカディアン照明を使用することで、新生児の生体リズムが

乱れないよう配慮をしています。また、NICUの各ベッドは面会廊下から直接入ることができ、家族がスタッフステーションや他の新生児の前を通らず気兼ねなく子供と面会できるようにしています。

## ■将来展開への備え

今回のプロジェクトは、2005年に参加した新病棟建設（現中・西病棟）

## 建替え変遷



中・西病棟建設前（※2）



中・西病棟竣工（2011年）



新中央診療棟竣工（2024年）



美濃和紙照明と美濃焼タイルを使用した総合待合



フロア全体の外来受付を一望できる外来モール

プロポーザル時に想定した内容が実現したものです。当時、南側敷地に建替え余地を残す提案をし、20年後にその場所に今回の新中央診療棟が完成しました。このように病院の建替えでは常に将来展開を見越しスムーズに機能を更新できることが重要になります。

今回もこの先既存棟が解体され、エントランスなどが再編されることを想定した動線計画としました。将来的に木製カーテンウォールの待合ホールは、新しいアプローチに面した病院の顔となる空間へと場面転換することを意図しました。

（文責 川村真弘）



北東側外観（右側は既存管理棟）



将来予想図（既存管理棟解体後）

## 太陽の明るさを再現したサーカディアン照明



昼間の照明（※1）

夕方の照明（※1）





メインアプローチよりエントランスを望むー地域の伝統工芸「南部裂織」の市松柄をイメージしたタイル貼りの外観

青森県十和田市内にある精神科病院の移転新築プロジェクトです。

計画が始まった2017年当初、街の中心地にある既存病院敷地での建替えを計画していましたが、法的規制が厳しく計画の自由度が下がることや、複数のステップにわたる長期建替えとなることもふまえて検討した結果、十分な広がりのある新敷地にて移転新築する計画となりました。

#### ■風土に即した病院建築

十和田の市街地は、遠くに八甲田の山並みを望む平坦な台地の中に、整った街区が続く特徴的な街ですが、冬季における北西の季節風が強いことも地域性の一つです。歩車共に雪や風を避けて安心して訪れやすいように、メ

インアプローチは病棟階の多角形のボリューム形状が張り出すピロティ空間にある主玄関へと誘導し、天候にかかわらずアクセスしやすい形態としました。機械室やサービス諸室を病院機能と離れた配置とし、その間に屋内的な車路を通すことにより、物品の搬出入やサービスアプローチを安全に行うことができるようにしています。

また、季節の気温変動だけでなく、朝晩の寒暖差も大きいことから、24時間・通年稼働する病棟部分に外断熱工法を採用し、常に安定した温湿度を保ちやすくしました。一方で外来などの運用時間が限定される階は内断熱として空調の立ち上がりを速くし、効率的にエネルギーを使えるようにしています。

#### ■訪れやすい外来診療空間

エントランスホールは、間接照明を用いて明るく十分な広がりをもたせ、外壁タイルや軒天を一部引き込んだ街路的な演出をすることによって、初めて病院を訪れる方にも開放的でゆたうと感じられる空間としました。このホールから少し奥まった位置に、プライバシーが守られた落ち着いた環境を確保し、待合と主たる診察室群をひとまとまりとして配置しました。

一般外来とは別に、救急入口から直接アクセスできる個別的な待合と診察室を準備し、感染対応などにも使用できる診療エリアとして機能できるようにしました。



明るく開放的なエントランスホール



緑が見える落ち着いた外来の待合



鳥瞰全景（※）





光庭周りに小さな生活スペースを持つ病棟ユニット



作業療法につながる病棟食堂



障子付き窓からやわらかい光が入る個室的4床室



木造屋根の梁部材を現しにした多目的アリーナ

## ■ユニット型の病室群

入院患者にとって、ひとりになることができる場所とその周辺環境が重要です。4床室であっても各ベッドに窓があり、袖壁で三方囲むことで安定感のある個室に近いベッド廻り環境としました。治療に応じて、自傷・他害など特有の症状に配慮できる保護室や準保護室、身体的ケアを重視した観察室、感染対応時には隔離室となる個室など特徴のある病室を設定しました。

また、いくつかの病室と、身近な水まわり、自然光や風を感じる光庭、談話コーナーで構成されたまとまりをユ

ニットと捉え、病室から一步出た先の環境が大きすぎない空間としています。患者にとって一番基本的な生活行為であるトイレや洗面、入浴・洗濯などを行う中で、この小さな共用部で少しずつ他者とのかわりや会話が生まれることを期待しています。いずれのユニットもスタッフステーションからさりげなく見守ることができ、夜勤時などのスタッフの安心感にもつながる配置となっています。

## ■段階的に選択・拡張できる生活空間

患者が社会復帰に向けた様々なリハビリを行う中で、閉鎖環境でも活動を段階的に拡張できる多様な空間を用意しました。病棟内にはユニット廻りの生活の場や食堂など複数の居場所を設け、その延長に日中のリハビリ空間としての作業療法室があるように同じフロアに配置しました。さらに専用のリハビリ階段で1階のアリーナや中庭まで活動を広げる仕掛けをつくり、運動や屋外活動を安全に行うことができますようにしています。患者自身が主体的にこれらの場所を選択し生活することにより、病棟やその延長の中でも

社会復帰に向けた活動の準備ができる環境を実現しました。

## ■地域と共にある“いつでも頼りになる治療のための病院”

住宅と田畑が混在する周辺環境の中で、外観はモザイクタイルと左官材の2種類を切替えて外壁を分節化した威圧感のないファサードとし、地域のスケール感に近づけました。落ち着いた赤色のせっ器質タイルとアリーナの屋根がシンボルとなり、街全体が白い雪景色となる時期においても地域の中で存在感を示し、“いつでも頼りになる治療のための病院”を建築的に表現しています。

(文責 小島千知)

## □建築概要

建築主：一般財団法人 済誠会

所在地：青森県十和田市

病床数：210床

構造規模：

病院 / 鉄筋コンクリート造一部鉄骨造  
地上4階

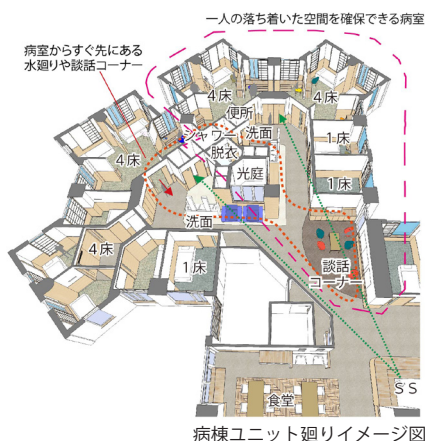
アリーナ棟 / 鉄筋コンクリート造一部木造  
平屋

延床面積：11,576㎡

竣工年月：2024年3月

撮影：十和田済誠会病院(※)

増田寿夫写真事務所



病棟ユニット廻りイメージ図





南側外観（左から本館・別館・外来棟）



庇が日差しを和らげるメインエントランス



光が差し込む開放的でわかりやすい1階待合



床のポイントカラーが映える2階EVホール



外壁の凸凹をベンチに活かした外来待合

長崎市を中心に医療・福祉を担う社会医療法人春回会の本拠地「井上病院」の再構築プロジェクトです。市中心部の国道沿いに立地する既存病院の並びに「外来棟」を新築し外来部門を拡張、眼科は手術室を備えたアイセンターに生まれ変わりました。

### ■地域の拠りどころとなる、アプローチしやすい建築

国道側から1階の外壁を引き、上階が庇代わりとなる入りやすいエントランスとしました。外来が3層（1階～3階）にまたがるため、建物に入ると広がりのある待合を介して受付やエレベーターが目に入る、わかりやすい空間構成とし、安心して受診できる環境としました。

外観は優しい色合いのタイルに、西日や騒音対策としてスリット状の窓を設け地域の顔となるデザインとし、内観は暖かみを感じる自然素材を取り入れました。

### ■質の高い医療に対応する環境

診察・処置室が並ぶ2・3階は同様のつくりのブースを並べ、多種多様な診療科に柔軟に対応できるようにしました。5階アイセンター外来はエレベーター（EV）を降りると全体を見渡すことができ、コントラストを意識した色彩計画で視認性の良い空間としました。

感染症対策として玄関や縦動線は患者用と病院スタッフ用を明確に分け、玄関脇には発熱患者に対応できる予備診察室を設けました。

専門的な検査室や手術室のある既存本館とは専用の通路で連携を図る計画としました。

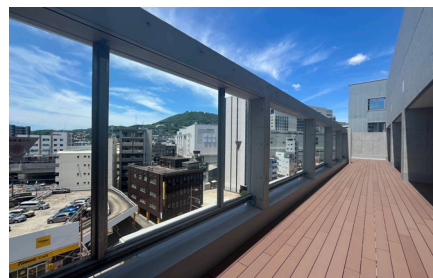
### ■将来の変化に柔軟に対応する病院

6階は多用途に使用できるホールを設け、災害時には診療スペースとして活用できる設備を準備しました。将来病院のリニューアルなどをする際にはこのホールを一時的に別機能に置き換えることも想定しています。

（文責 山田明子）



EVを降りると全体が見渡せる5階アイセンター



6階ホールに面するテラスからは稲佐山を望み、スタッフのリフレッシュエリアとなる

### □建築概要

建築主：社会医療法人 春回会  
所在地：長崎県長崎市  
構造規模：鉄筋コンクリート造  
地上6階  
延床面積：3,389㎡  
竣工年月：2024年5月  
撮影：増田寿夫写真事務所





北東側外観



木のぬくもりが感じられる居室



ダイニングセンター



療養階エレベータホール



柔らかな光が入る機能訓練室

超強化型老健として宮地病院と共に地域を支えてきた「老人保健施設あずさ」の移転新築であり、「個々の生活を継続させる療養環境」と「感染症に柔軟に対応しやすい老健」を新たなコンセプトとして取り組んだプロジェクトです。

多床室での感染症抑止が難しかった経験から全室個室で構成しています。居室を4室ごとの個室群としてまとめ、近隣の景色が所々顔をのぞかせる空間を廊下に面して設けることで、自室が分かりやすく、光や風が入る共用空間を用意しました。

個室そのものが自らの生活を組み立てやすい場であり、そのそばにリビング・ダイニングや機能訓練室、庭園を設け、療養生活そのものが在宅復帰に向けたリハビリに繋がることを意図しています。また、感染症対策として一部エリアの居室を陰圧対応とし、状況に応じ段階的に感染症管理エリアを調整しやすい仕組みを用意しました。

街に開かれたダイケアは、利用者が数グループに分かれて活動する場合もソファや家具で容易にエリア分けしやすいL型の大きな空間としています。

透かし積みレンガを外観に取り込み、古きよき神戸の街並みを連想させる素材として用いて、隣接する「潮騒の家」とは雰囲気を変えた表情にしています。

利用される高齢者にとって住み慣れた地域の中で、六甲山や湾岸、街並みを眺められる環境を活かしながら早期在宅復帰に向けた環境づくりを心掛けました。

(文責 範國幸子)

#### □建築概要

建築主：医療法人 明倫会

所在地：兵庫県神戸市

定員：介護老人保健施設 100 名

ダイケア 80 名

構造規模：鉄筋コンクリート造

地上 4 階

延床面積：4,174㎡

竣工年月：2024 年 6 月

撮影：増田寿夫写真事務所



南側外観(夕景)



東側外観





看護小規模多機能型居宅介護事業所 居間・食堂



1階クリニック待合



外観全景

クリニック、訪問看護事業等の拡充と、看護小規模多機能型居宅介護事業（看多機）新設のための移転計画です。

訪問事業の駐車場を確保するため、建築面積を抑えた3階建てとし、長年の診療・看護による知見を活かした機能的な動線計画を目指しました。

1階のクリニックの待合室は、ゆとりをもたせ、アプローチに面した明るく開放的な空間とし、診療時間外には地域の高齢者の交流の場としても活用

して頂いています。

2階の看多機は廊下をなくし、家庭的な居心地の良さと目配りのしやすさに配慮しました。リビング隣の和室は、日中は坐って寛げる共有スペースとして、夜間は利用者個室として兼用できるよう戸襖を工夫しました。限られた面積の中でも共有空間に変化を持たせ、利用者が居場所を選べるように柔軟性に富んだ計画としています。

（文責 小林桂）

#### □建築概要

建築主：医療法人財団 利定会  
所在地：東京都青梅市  
施設内容：クリニック、看護小規模多機能型居宅介護事業所、訪問看護ステーション、訪問介護ステーション他  
定員：登録29名 通い18名・宿泊6名  
構造規模：鉄筋コンクリート造 地上3階  
延床面積：819㎡  
竣工年月：2023年12月  
撮影：千葉顕弥写真事務所

## 特別養護老人ホーム 談話館



南側外観



共同生活室（1階）



居室 ベッドを寄せれば1歩でトイレを使用可能

茨城県石岡市にある介護老人福祉施設（特養）既存60床に2ユニット20床を増築するというプロジェクトです。完成度の高い既存建築のデザインを尊重・踏襲しつつも、私たちが関わることでその価値を高めることを目標としました。

終の住まいとなることの多いこの施設での生活がより充実したものとなるように、①共用部分に周辺の豊かな自

然を取り込むこと②個室～共用生活室を「個」と「共用」と二極と捉えるのではなく、多様な「場」を連続させることで選択肢を増やし豊かにすること③利用者の尊厳を守るために、最後まで排泄の自立を促すことを重要なテーマとして設計しました。

（文責 鈴木慶治）

#### □建築概要

建築主：社会福祉法人 やまびこ  
所在地：茨城県石岡市  
定員：20名（全体80名）  
構造規模：鉄筋コンクリート造 地上2階  
延床面積：1,074㎡（増築）  
竣工年月：2024年5月  
設計監理：共同建築設計事務所・松島設計室 共同企業体  
撮影：スズキスタジオ



社外報 2025 Vol.26

発行年 2025 年 春

発 行 株式会社 共同建築設計事務所

編 集 高橋良江 所恵子 小林千絵子

本常利恵 高瀬敦



株式会社 共同建築設計事務所  
KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

[www.kyodo-aa.co.jp](http://www.kyodo-aa.co.jp)

□本社 〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 4-10  
□東北支社 〒980-0022 仙台市青葉区五橋 1- 4-24  
□関西支社 〒533-0033 大阪市東淀川区東中島 1-17-18  
□九州支社 〒812-0013 福岡市博多区博多駅東 3-5-16

TEL 03-3359-6431 FAX 03-3359-6449  
TEL 022-722-0915 FAX 022-722-0917  
TEL 06-6195-3621 FAX 06-6195-3622  
TEL 092-473-7370 FAX 092-481-3298

